



山を買って、 教えてもらったこと

2016年冬、岩見沢市に8ヘクタールの山を買った。東京で生まれ育ってアウトドアの経験もほとんどなく、衝動買いとっていいかもしれない。

最初に山林を探し始めたのは、自給自足的な暮らしを行うコミュニティであるエコビレッジをつくりたいと思ったから。10年前に北海道へ移住し、この地で自分にできることは何かを模索していたときだった。仕事や暮らしに疲れた人が羽を休め、みんなで協力しながら暮らしていける場所があったら。そんなことを考えていた。

いくつか土地を見ていくうちに、エコビレッジづくりは容易でないことがわかった。まったくの素人だったので思いが及ばなかったのだが、森を開墾しインフラを整備するには大掛かりな作業が必要になることに気づいた。計画はいったん白紙にしたのだが、私は「山を買ったらどうなるのだろう?」というワクワク感を消すことができず、友人から紹介してもらった土地を購入することにした。

敷地のうちの1ヘクタールは、もとの所有者が植林をした後に皆伐しており、ここに新たに木を植えることとなった。買ったばかりの頃は、家族でたびたび山を訪れ、山菜を採ったり、簡単な東屋をつくったりして楽しんだ。

東京の仕事仲間に「北海道に山を買った」と話すと、「えっ、山って買えるの?」と誰もが驚き、目を輝かせた。どうやったら買えるのを知りたいという仲間も多く、それならば、買った経緯をまとめてみよう、小さな冊子『山を買う』を制作した。冊子づくりは個人的な活動だったが、地元の本屋さんが何百冊も販売してくれ、そのおかげもあって新聞で紹介してもらったり、ラジオに出演したりなんてことも起こった。

やがて山や林業について、もっと知りたいと思うようになった。山林を探し始めた頃から、マガジンハウスのウェブサイト「コロカル」で月2

回の連載を担当しており、折に触れ、山主や林業関係者に取材をするようになった。

こうした活動を続けていたところ、「山を買う」ということへの関心が世の中でジワジワと高まっていくのが感じられた。さらに新型コロナウイルスの感染が拡大する中で、ソロキャンプに注目が集まり、雑誌やテレビで山購入の特集が組まれるようになった。

私のところにも、山の買い方を詳しく知りたいという問い合わせが多くなった。そのため、これまで取材してきたことを『続・山を買う』にまとめた。購入のノウハウを具体的に説明したものだが、最も伝えたかったことは市街地にある土地を買うのとはまったく概念が違うということだった。

庭を手入れするような気持ちで少し木を植えたりしても、風景は微塵も変化しないし、広すぎて全貌を把握できるわけでもない。もちろん、間伐などして森を健全な状態に保つことに多少なりとも力を発揮できるかもしれないが、基本的には着々と四季の営みを行う自然を見ていることしかできない。仮に気候変動が起こって山肌が崩れるようなことがあっても、それをそのまま受け入れるしかないだろう。山は地球の一部であって、たまたま私がそれを預らせてもらっているだけなのだ。

ソロキャンプが楽しくて山を買った人は、なんらかの理由でキャンプができなくなったとき、その山を手放すのだろうか? 山を何かに活用するのは重要なことかもしれないけれど、活用を超えた次元で物事を捉え、次世代に引き継ぐことはできないのだろうか?

最近は仕事も忙しく山に行く機会はめっきり減っているが、それでもいいと思っている。買って見て、山を地球の一部としてただただ愛するというのが何より大切だと思えたからだ。

来嶋 路子さん

Michiko Kurushima

編集者、北海道教育大学非常勤講師。東京都出身。1994年に美術出版社入社、『みづゑ』編集長、『美術手帖』副編集長など。2011年に北海道へ移住。2015年に独立。現在「森の出版社 ミチクル」という出版活動を行い、『山を買う』などを刊行。ウェブサイト「コロカル」、JR北海道車内誌で連載中。

